The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	グギ・ワ・ジオンゴと初期ジャーナリズム
Author(s)	宮本, 正興
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2014, 25, p. 66-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72981
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

グギ・ワ・ジオンゴと初期ジャーナリズム

宮本　正興

本稿は、評伝『グギ・ワ・ジオンゴ：人と作品－20 世紀アフリカ文学の遺産』（仮）のタイトルで準備している著書の第 5 部「文学と思想の軌跡」の一部である。「脚注」は、一、二の例外があるが、全体のこの部分での必要最小限にとどめている。なお、本稿表題の作家が、ジェームズ・グギ（James Ngugi, J.T. Ngugi）でなく、グギ・ワ・ジオンゴ（Ngũgĩ wa Thiong'o）を名乗ったのは、著作の上では 1972 年以降（法律上の改名の届け出は 1977 年 9 月）である。本稿は、主に 1961 年から 1964 年の頃を対象にしているが、便宜上、後者の名前を採用した。

0. はじめに

グギ・ワ・ジオンゴが、まだジェームズ・グギを名乗っていた頃、それも、マケレレ大学の学部学生であった 60 年代初めから卒業直後の 1964 年にかけて、約 80 篇のコラム記事を、ナイロビの有力新聞に寄稿していた。それは、1961 年 5 月から 1964 年 8 月にかけての 40 ヶ月のことで、寄稿先は、初めは「サンデー・ポスト」紙 (*Sunday Post*)、ついで「サンデー・ネーション」紙 (*Sunday Nation*)、そして大学卒業後リーズ大学留学までの期間は「デイリー・ネーション」紙 (*Daily Nation*) だった。後者の二紙は、発行曜日の違いから名称が異なるだけで、ともに「ネーション」社[1]の発行である。

これらを一括して「初期ジャーナリズム」[2]と呼んでおこう。そこでは、多様なテーマ

---

[1] 「ネーション」社：1959 年、インド系資本アガ・カーンが創業。現在、東・中央アフリカ最大のメディア・グループに成長している。

[2] 「初期ジャーナリズム」。アフリカ文学研究者の B. リンドフォースが使った用語。同氏は、現在テキサス大学 （オースチン）の名誉教授、特にアフリカ文学の書誌学的研究で知られる。「初期ジャーナリズム」の作品リストが以下の著書に掲載されている。*The Blind Men and the Elephant and other essays in biographical criticism*, Africa World Press, 1999, pp.87~91. 同じリストが、以下にも再録されている。*Early East African Writers and Publishers, Ngugi wa Thiong'o, Okot p'Bitek, David Maillu*, Africa World Press, 2011, pp.34~37.
筆者は、1979 年 8 月から 9 月にかけて、ナイロビ大学図書館でこれらの資料を収集した。当時の文学科の科長は、ヘンリー・オウール・アニュンバ (Henry Owuor-Anyumba) 教授で、クリス・ワンジャラ (Chris Wanjala) 教授も同大学におられた。二人のご支援で、同大学ガンジー記念図書館などを利用し、関係資料を持ち出して複写することが出来た。当時は、グギ・ワ・ジオンゴの大学解雇が

が扱われており、その後の文学観、思想、社会的関心の変化を辿るうえで興味深い資料となる。

「サンデー・ネーション」紙のコラムは、「私の見たまま」(As I see It) と題されている。同じタイトルで、インド人のトーファン(N.S.Toofan) が定期的に寄稿していたから、グギの場合は「アフリカ人の視点」ということなのであろう。当初は、最終ページに掲載されたが、のちに第 5 面ないし第 6 面に移ったのは、記事が注目を集めた結果だろう。いずれも短文であるが、多方面の分野で、60 年代初期、ケニア独立前後の時代の関心と考え方を知る上で役に立つ。

それらを見ると、その後に大きく変化した思考があり、同時に、変化していないと思われる論点もある。変化した思考の中には、まさに 180 度の大転換とさえ言える内容が多く含まれている。ここに示された変化は、この 50 年のアフリカ、とりわけてケニアで起きたことを洞察するうえで、大いに啓発的である。なぜなら、「グギの関心事は、アフリカの関心事」(Ngugi's concern is Africa's concern)、「グギは大陸の声」(Ngugi Speaks for the Continent) とまで言われてきたように[3]、これらを知ることは、現代ケニア、ひいては現代アフリカのこの 50 年を振り返ることになるからである。

この期間は、大陸全土はもちろん、東アフリカの政治社会史上で、めくるめく大変革の時代であった。1960 年の「アフリカの年」（17 ヶ国が独立）を経て、1961～1963 年には、タンガニーカ、ウガンダ、ザンジバル、ケニアが政治的独立を達成した。また、マケレレ大学を卒業し、リーズ大学に向けて出発する直前の 1964 年 1 月には、ザンジバルで社会主義革命が起き、同年 4 月にはタンガニーカとザンジバルが合併、タンザニア連合共和国が成立した。「アルーシャ宣言」[4]のあった 1967 年から 1977 年までは、東アフリカ共同体 (East African Community) [5]が存続し、ケニア、ウガンダ、タンザニアの三国が、鉄道・航空機な

正式に決まった頃で、これらの資料のことをリムルを訪ねた折に話すと、本人は大いに困惑した表情を見せたが、自分にもコピーを欲しいと述べた。「初期ジャーナリズム」の内容の一部が、後日の反省材料になっていることは、本書第 5 部に収録した「リーズ時代のグギ・ワ・ジオンゴ」で紹介している。

[3] 「グギの関心事は、アフリカの関心事」(Ngugi's concern is Africa's concern)。これは、クリス・ワンジャラの用語。「グギはアフリカの声」(Ngugi Speaks for the Continent)。これは、1962 年、カンパラで戯曲「黒人の隠者」公演後に、マケレレ大学教授トレバー・ウィトック(Trevor Whittock) 教授が大学新聞「マケレレアン」(*The Makererean*) への寄稿文で使った用語。

[4] Arusha Declaration. 1967 年 2 月、タンザニアのニエレレ大統領が発表した社会主義化の宣言。農業開発を基盤に、自律的な経済発展を期した。宣言と同時に、主要外国企業が国有化された。

[5] East African Community. 1967 年 6 月、カンパラで東アフリカ三国の元首の調印によって成立した三国協力条約で発足。東アフリカ開発銀行などを設置して、共同市場など三国間の平等の便宜を謳っ

どの輸送機関、コミュニケーション・システム、通貨などを共通にし、「東アフリカ連邦」の夢が掲げられた時代だった 。

1. 「サンデー・ポスト」紙の 5 篇

こうした政治史的背景を念頭に置きながら、まず 1961 年 5 月から同年 8 月にかけて、「サンデー・ポスト」紙に寄せた次の 5 つの記事を見ておこう。

1) 「アフリカ的人格[6]は妄想だー虎は『ティグリチュード』[7]を持つか」'The African Personality' is a Delusion：Do Tigers have 'Tigritude'? *Sunday Post*, 1961.5.7.
2) 「新しい声：アフリカ人作家の登場」The New Voices：Some Emerging African Writers, *Sunday Post*, 1961.6.4.
3) 「アフリカの文化：ケニヤッタの誤り」African Culture：The Mistake That Kenyatta Made, *Sunday Post*, 1961.8.6.
4) 「『ケニア山のふもと』のノスタルジア」The Nostalgia of '*Facing Mount Kenya*', *Sunday Post*, 1961.8.13.
5) 「新開拓村の問題点」Some Problems of the New Villages, *Sunday Post*, 1961.8.20.

これらのうち、初めの 4 つは、文学ないし文化に関するもので、最後のものは、ケニア社会経済史の最重要問題ともいうべき「土地」を扱っている。以下、それぞれの内容を簡単に見ておこう。

1) 独立ガーナの初代大統領ンクルマの提唱した「アフリカ的人格」(African Personality) というコンセプトを、詩人で、独立セネガルの初代大統領サンゴールなどフランス語圏知識人の「ネグリチュード」(Négritude)[8]の混ぜ物として批判している。アフリカ人は、ヨ

た。その後の政治・経済情勢の変化から 1977 年 6 月に解体した。

[6] African Personality. ガーナの初代大統領ンクルマ(Kwame Nkrumah, 1909~1972) の著書の一つに、*The African Personality*, 1963 がある。

[7] Tigritude。ナイジェリアの作家ウォーレ・ショインカの造語。ネグリチュードへの批判に用いられた。

[8] 「ネグリチュード」Négritude. 1930 年代から、パリに集まったサンゴール、エメ・セゼールなど、フランス領出身の、主にフランス語で書く詩人・作家が主唱した、アフリカ・黒人文化の復権運動。黒人には、独特な内的世界、宇宙認識論、芸術想像力、美的感覚などがあるとし、近代西欧の価値を揶揄・批判した。

ーロッパ列強による植民地支配に対して、各地で闘いを展開したが、こうした共通の経験が、アフリカ人に独特かつ共通の「人格」、あるいは一体性を与えたとは思わないという。「人格」は、人それぞれに固有で、たがいに違っている。人種に固有の、独特なパーソナリティがあるとは認められず、ンクルマやサンゴールに反駁している。当時の東アフリカで、それほど知られていなかったナイジェリアの先輩作家アチェベやショインカのネグリチュード批判に味方している。（なお、「ティグリチュード」(Tigritude) はショインカの造語である。ショインカは、「ネグリチュード」を一蹴して、「森林では、トラはティグリチュードを要求しない、ただ跳びかかるだけだ」と「ネグリチュード」を揶揄・批判した。また、南アフリカのエゼキエル・ムパシェーレも「ネグリチュードの意義を問う」[9]という文章で、これに反発した）。

2) ピーター・エイブラハムズ (Peter Abrahams, 1928~, 南ア)、ノニ・ジャバブ (Noni Jabavu, 1919~2008, 南ア) [10]、アモス・トゥトゥオラ (Amos Tutuola, 1920~1997, ナイジェリア) 、シプリアン・エクウェンシ (1921~2007, ナイジェリア)、チヌア・アチェベ (1930~2013, ナイジェリア) 、ウィリアム・コントン (1925~2003, ガンビア)[11]らの名が挙がっている。アフリカ人作家にとっての二つの問題、つまり使用言語と読者の問題に触れている。母語で書けば、読者層が部族的レベルに極限されることから、宗主国の言語、つまり英語などの外国語で書かざるを得ない現状を訴えている。また、独立期の数少ない教育エリートが、文学でなく、なぜ医学や法律を学んで、国家の発展と近代化の先頭に立とうとしないのか、という世間の声にも注意を向けている。一生の仕事として、文学の道を選ぶのに、相当な勇気と決断が必要であったことは、時代と場所を問わず変わらないだろう（たとえば、明治期の日本）。新興アフリカ諸国の場合の、より困難な事情は想像に余りある。

---

[9] Mphahlele, Ezekiel, What Price 'Négritude' ? in *The African Image*, 1962, pp.25~40. 橋本福夫訳「ネグリチュードの意義を問う」『民族の独立』（現代人の思想 17）、平凡社、1968.

[10] Jabavu, Noni (1919~2008). 南アフリカのイースタン・ケープ生まれの女性作家。コーサ民族。身内には、ジャーナリスト、教員が多かった。10 代でロンドンへ渡り、作家活動やテレビ関係の仕事に従事した。代表作は『皮膚の色に引き込まれて』(*Drawn in Colour*, 1960)、『赤褐色の人々』(*The Ochre People*, 1963) など。

[11] Conton, William (1925~2003). ガンビアのバサースト（現バンジュル）生まれの作家。ガンビア、ギニア、シエラレオネで小学校生活の後、英国へ渡り、再びシエラレオネへ戻り中学、大学で学んだ。中学校長などの後、政府に勤めた。代表作の『アフリカ人』(*The African*, 1960) は、アラビア語、ロシア語、ハンガリー語などに翻訳された。短篇のほか、歴史の教科書の執筆も多い。

3) 西洋の生活様式や価値観に幻滅したアフリカ人教育エリート、特にネグリチュードの詩人たちによるアフリカの過去、黒人性の美化、賛美に疑問を呈している。もはや、過去に戻ることは出来ない。「過去が、歪んだ鏡を通して眺められる傾向がある。『ケニア山のふもと』を一読すれば、ケニヤッタにも同じ傾向が見られる」としている。[編集者は、この一文に「ケニヤッタの誤り」との副題を付けた。のちに独立ケニアの初代大統領になるケニヤッタは、この時、7 年間の拘留生活を終えて釈放されたばかりだった]。

4) 編集者が付けた先の記事の「副題」への抗議、ならびに真意の補足説明である。「ケニヤッタが過去への復帰を説いているわけではない。『ケニア山のふもと』は、部族の伝統への回帰の必要を説いているのでなく、過去の文化への共感と理解を持って書かれた学術書である。政治家ケニヤッタを批判しているのでなく、人類学者ケニヤッタを称賛している」とした。

5) 植民地期の土地政策の遺制、農民の土地喪失、ならびに広範な失業問題を扱っている。独立への期待と同時に、過剰な期待が幻滅を招きかねない事態を予測し、警告している。

以上 5 編の寄稿の後、1962 年 5 月までの 9 ヶ月間に、新聞への寄稿は見当たらない。おそらく、61 年 12 月までは、執筆中の小説『川を隔てて』の最終的な推敲、そして 62 年 1 月から 6 月までは第二作目の小説『泣くな、わが子よ』の執筆に専念し、さらには初期戯曲の執筆と上演活動に時間を取られたのであろう。

とはいえ、「ケニア・ウィークリー・ニュース」の 62 年 3 月 23 日号の小さな記事によると、ケニアのある英字新聞が、マケレレの学生に執筆スタッフを募集したところ、ケニアの全新聞社をもってしても雇いきれないほど多数の応募があったという。おそらく、その英字新聞とは「サンデー・ネーション」紙だった。この記事の 2 ヶ月後から、ジェームズ・グギ（後のグギ・ワ・ジオンゴ）が「私の見たまま」(AS I SEE IT)と題するコラムを同紙に書きはじめた。（一部は、同系列の「デイリー・ネーション」紙に掲載）。

本稿末尾に、それらを含め、「初期ジャーナリズム」の全 78 編のタイトルを日付順で示し、内容についてキーワード程度の覚え書を添えた。

2. 初期ジャーナリズム 78 篇：内容の分類

以下では、先の 5 編を含めて、全 78 篇を内容から 4 つのジャンルに分類した。一つの記事が複数のテーマにまたがったり、あるテーマが一つのジャンルに限定されえないのがむしろ普通で、ここでの分類は暫定的なものである。

① 【政治・経済】36 編

5,7,12,13,15,16,17,19,20,22,24,25,28,31,35,41,42,44,46,48,54,56,57,59,62,63,
66,68,69,70,71,72,73,74,75,78.

② 【社会・文化】18 編

1,3,4,8,14,18,26,29,32,33,36,38,40,47,50,52,60,76.

③ 【文学・演劇・言語】9 編

2,10,21,27,30,51,61,64,65.

④ 【教育】15 編

6,9,11,23,34,37,39,43,45,49,53,55,58,67,77.

植民地から独立へ、アフリカ民族主義のピークの時代を受けて、政治・経済的内容のものが圧倒的に多い。しかし、それらの内容は、後年に示されるようなラディカル、ある場合には、ミリタントな内容は稀で、むしろ抑制とバランスのとれたリベラル、時には常識的と思える内容が多い。マウマウ武装闘争の記憶が複数の記事で思い出されるが、植民地から独立への移行に、血を見る必要はないとの文章も見られる。また、ンクルマ批判も重ねて見られる。マケレレ大学職員ストの際には、このストライキに反対している。また、タンザニアのモシで開催されたアジア・アフリカ人民連帯大会に触れて、帝国主義を攻撃ばかりしてはならないと述べ、アフリカ・アジアの連帯は、スローガンを叫ぶよりも、実践的な繋がりをつくることが大切だと注文を付けている。

『ケニア山のふもと』の再評価では、アフリカ人の尊厳の復権、精神の植民地化が最悪である。これは人間の尊厳と自信を掘り崩す。まず政治的自由を、ついで経済基盤の地固めを、そして文化を基盤にした社会制度の発展をと説いて、「その時には、我々の学生を、

共産主義的、社会主義的と称されるような曖昧な、半文明開化 (half civilized) の国々へ送る必要はなくなるだろう」と述べている[12]。共産主義・社会主義に反対するか、もしくは揶揄・批判していると見られる。また共和制への移行に賛成し、大統領権限の一層の強化を訴えている。

他方、人種間の悪感情を払拭し、人種協調の必要を説いて、独立への心構えを促す文章もある。独立への挑戦として、貧困、疾病、文盲の退治が緊急課題だとされる。古きアフリカの時代、「黒い人形」(black doll) を懐かしむレオン・ダマ[13]の詩を引用しながら、「西洋文化に対して、一方的に反発するのでなく、人類の過去の全遺産から人間性を豊かにするような良いものを選択して取り入れる必要があると説いている。女子割礼や婚資制度は、もはや時代遅れで、廃止すべきであるという。また、何ごとにも、アフリカ的特性を注入しなければならないのかと問い、『アフリカ』社会主義[14]の談義に飽きた」ともいう。

このほか、扱っている問題のキーワードを示しておこう。

【政治関連】

政党の部族的性格の打破。一党制の必要。検閲制度に反対。新聞報道の自由・民主主義の尊重。東アフリカ連邦構想。バンドン会議。アフリカとアジアの出会い。インド独立。ガンジー、アフリカの独立運動を刺激。非暴力肯定。アフリカでも非暴力哲学が必要。ナイジェリア＝共和制、ウガンダ＝独立一周年。独立への三段階は、①政治的自由（教育エリートは恩恵に浴するが、大衆はすぐには恩恵に浴せない） ②経済的自由 （大衆の生活水準の向上へ） ③心理的自由 （人間的尊厳、自尊心の回復、劣等感からの脱却）。ケニアの共和制の必要。大統領権限の強化必要。ウガンダの独立について。マケレレ大学職員スト。ストライキに反対。独立への挑戦として、貧困、疾病、文盲の退治。

---

[12] 独立当初、副大統領オギンガ・オディンガが、社会主義圏、共産国への留学生の派遣に特に熱心であったことを指していよう。

[13] Damas, Léon (1912~1978). フランス領ギニア生まれ。フランス語で書く詩人。マルチニックで学び、エメ・セゼールと知り合った。のち、パリでサンゴールらとネグリチュード運動の嚆矢となる『黒人学生』 (*L'Étudiant Noir*) 誌を創刊した。

[14] アフリカ社会主義。ブラック・アフリカでの、独立と国家建設のための開発を目的とした社会主義の総称。さまざまなタイプがあるが、伝統アフリカに独自な社会主義が存在したとの考え方が根底にある。共同体的、家族的、人道主義的な特徴を強調することが多い。タンザニアのニエレレ大統領による「ウジャマア」(Ujamaa) 社会主義は代表的な例で、アフリカに特徴的な拡大家族の精神に支えられた、農業共同体を基礎に制度化したものだった。

【経済関連】

貧困層、土地を持たない農民層。衣食住の保証が必要。経済発展、国民の一致した協力体制。外国による支配からの自由。

【労働運動】

ケニア労働総同盟の分裂。労働組合運動のためには、統一、結束が大切。労働者の年金制度。都市労働者＝家族との絆崩壊。障害者の雇用問題。保険制度の強化必要。失業問題。年金制度の保証。

【農業関連】

基盤の確立 （農業生産の向上から国家経済の向上へ。農民の技術教育の必要。農業技術指導者の不足。農業教育の必要、農業資本の基礎確立を説く）。

【土地政策】

借地制度の問題点。借地人制度 (Ahoi) が土地の分割化・細分化を促進している。100万人入植計画。土地開発計画。土地を持たない者の協同組合を提唱。

【人種問題】

人種間の悪感情を払拭し、人種協調の必要を説く。人種主義・部族主義の克服。

【文化：独立への心構え】

西洋文化に対して、一方的に反発するのでなく、過去の全遺産から人間性を豊かにするものの選択必要。女子割礼、婚資制度は時代遅れで、廃止すべきである。女性の権利の拡充、擁護。密造酒、若者の飲酒。失業と飲酒。収賄。幼少時の体験。ナイロビ＝約束の町。都市生活を体験した兄。カンパラの素晴らしさ。演劇活動の魅力、カンパラの国立劇場。ローマカソリックとアングリカンの宗教的対立。

以下では、その後の作家活動、思想形成との関連で、特に注目される特徴的な見解をテーマ別に見ておこう。

3. 教育関連

教育については、以下を紹介しておこう。

① 「教育を受けたアフリカ人はこの挑戦に対抗できるか」(1962.5.17)

「サンデー・ネーション」に送った最初の記事 は、教育問題を取り上げている。その内

容は、教育に憧れた自身の思い出と経験が二重写しになっている。自身のアライアンス高校進学は 1955 年のことで、以下の文章に登場する村の少年より、3 年後のことだった。

> 村から初めて中学へ進学した少年のことを、私はよく覚えている。1952 年のことで、結構な大事件だった。少年の名前と評判が、野火のように、村から村へ広がった。後に残った我々に、ある老人がこう語った。「未来は教育を受けた者の手にある」。私は、この言葉を何度も聞いてきた。今でも、この時の老人の、熱のこもった言葉をよく覚えている。KAPE（小学校卒業資格試験）のハードルを超えた少年が皆から褒められ、羨望の的になることを知ったのは、この時だった。
>
> 教育の力によって、この少年は英雄になった。ごく平凡な「我々の仲間」から、「彼ら」－教育を受けた「彼ら」―の社会へ飛び立ったのだ。そうしたアフリカ人のポジションについては、さまざまなことが言われてきたが、そんな息子を持つことは、母親の誇りとなるのだ。だが、その子は、西洋式教育を受け、村の価値観から離れて行く。やがて、その子は、二つの世界の子供になってしまう。こうして、社会に階級の分化が起きる。じっさい、大学卒業生の給料は、月 1,000 シル以上、村の労働者は 15~16 シル程度である。社会に亀裂が走り、二つの種類の国民が誕生している。

教育問題は、「初期ジャーナリズム」に、繰り返し現れるテーマの一つである。ケニアにとって、「ウフル（独立）と土地は優先事項の第 1 位だ。その次は、教育だ」と述べている。この意味でも、国家発展の先進部分を担う若い世代、将来の指導者への期待は大きい。その場合に、正直 (Honesty)、誠実 (Truthfulness)、共感 (sympathy)、勇気 (Courage) の四つの美徳を説いている。「教育は家庭から」(Education should begin at home) ともいう。そうであるならば、アフリカ人の身の回りの生活に関連するような教育内容への改革が必要となる。植民地期の、宗主国中心、民族分断的な（ミッション）教育の弊害を是正しなければならない。教育の全面的な非植民地化が必要であるという。

女子教育の遅れも指摘している。たとえば、マケレレ大学では、1949 年の開設以来、これまでの女子卒業生はわずか 3 人であり、1962 年 10 月現在、ケニア人女子学生は 2 人しか在籍していなかった。

さらに非識字の克服は、民主主義の発展のためにも必要であることを指摘している。独立後の民主主義を支える国民の多くに識字能力がない以上、成人教育の緊急性は疑いがな

い。KANU の教育政策は、その意味でも重要で、ラジオ、テレビを利用した大衆教育も必要である。トム・ムボヤ[15]の言葉を借りて「教育は投資である」ことを強調している。教育は、コロニアル・メンタリティ、劣等感、依存心からの脱却のためにも必要である。教員などの人材不足。教育施設の改善と充実 (ウガンダに依存している現状の是正)、優秀な人材の多くが、教職よりも政治・行政職へ向かう現状からも、教員の待遇改善が望まれるという。

4. 言語・文学・芸術・演劇関連

言語・文学・芸術・演劇については、以下が注目される。

① 「新しい意識の伝令たち」(1962.7.1)

これは、1962 年 6 月にマケレレ大学で開催された「英語で書くアフリカ人作家会議」への参加の記録である。『トランジション』誌（第 2 巻第 5 号、1962.7~1962.8）に再録時には「会議に出たケニア人」と改題されている。

② 「アフリカ人作家は新しい見方を」(1962.12.2)

この時期の文学観で、もう一つ興味深いのは、南アのアパルトヘイト下の抗議文学についての考え方である。

> 南アにおいて、黒人作家やカラード作家は、政治的な屈辱を自覚しないではおれない。「平安がなく」、たえず「逮捕の恐怖」の中に生きているからだ。いきおい、暴力と不安のなかで、作家は抗議に向かい、自由への希求の文学を生み出すことになる。人種差別の状況は、文学的には、むしろ取り組みやすく、そこでは類型化された人物が登場する。作家には、書く以前から、この差別の状況に怒りを覚え、共感してくれる読者大衆が存在しているのだ。それならば、文学の闘いは半ば終わったも同じである。人間の体験のすみずみを掘り起こす必要がなくなるからだ。南アの作家は、類型化された登場人物をつくりだすことで、作品が凡庸になることを知っている。せいぜい、それは社会学的ドキュメントとなり、政治学や社会学の学生の興味の対象となるのだ。

[15] Mboya, Tom (1930~1969). ケニアの政治家。KANU 創設メンバーの一人。ケニヤッタ政権時代の経済企画大臣。1969 年、暗殺された。

南アの作家が「抗議」文学に繋がれるとすれば、政治的自由のある他国の作家たちは、「ネグリチュード」や「アフリカン・パーソナリティ」を主張する危険がある。植民地期には、「ネグリチュード」、「アフリカン・パーソナリティ」といった用語にも意味があったかもしれない。しかし、独立後のアフリカでは、「抗議」文学も「ネグリチュード」も役には立たない。それらは一つのポーズ、態度でしかない。文学にとっては、永久不変の人間的経験の巨大な未開拓領域が残されているのだ。アフリカ人作家は、人間の状況の細部に、共感と理解を持って触手を伸ばさなくてはならない。とりわけて、民衆の生命の脈動を感じなくてはならない。「ウフル」（独立）を生み出した国家のエネルギーに対して、文化の発散口（アウトレット）を与えられるべきである。

③　「求む―芸術にふさわしい場を」(1962.12.23)

「政治、政治。新聞を広げる度に、政治談議と論争がまともに眼に入る」との文章が冒頭にある。これは、政治より、むしろ文化に重点があることを示す言い方である。作家を含めて、芸術家の生き方を問題にしている。

文化の覚醒の必要がある。特に芸術分野の覚醒が強く望まれる。芸術こそが、確実、安全な文明化の力となるからである。芸術家は、自分が住む世界の日々の雑事から身を引き離すことができる。と同時に、芸術家といえども、周囲の諸問題から身を離しておくことはできない。民衆の苦悩は彼のものである。国民の喜びは、彼の喜びでもある。芸術家は隠者ではない。日々の生活に関心がある。芸術家は、芸術を通して社会に奉仕し、必要な場合には、歓迎されない意見を出せるほどに孤高を守らなければならない。芸術家は、自分の個性を保持しなければならない。

④　「スワヒリ語に正当な位置を」(1962.9.23)

ここでは、アフリカ人作家が英語やフランス語などの外国語を使って書いている現状についての弁明が見られる。

その本当の理由を見つけるのは難しいが、アフリカ語が劣っているからではない。アフリカでは読書人口が少ないために、より広い読者を得るために外国語に頼らざるを

得ないのが現状だ。このことから、アフリカ人作家は、地元の読者よりも、むしろ外国の読者を念頭に置いていると言えるだろう。もう一つの理由は、アフリカの言語の研究が遅れていることがあげられる。これは植民地教育のブラック・スポットだ。東アフリカで、スワヒリ語が無視されてきたのは不思議なことだ。英語は、日々、ユニバーサルな言語になりつつある。したがって、学校のカリキュラムで、ヨーロッパの言語が二次的位置になることはないだろう。しかし、ケニアでは、英語は、役に立つとはいえ、不十分である。国民の大多数が英語を理解できないからである。英語は、国民的統一のためには不向きである。私たちの国家的抱負と精神的成長を表現できるような、我々自身の言語を持たない限り、ここしばらく、我々は、多少とも値打ちある国民になれるとは思わない。

演劇に関する記事から、以下の 4 編を紹介しておこう。演劇への関心の原点がここにあり、後のマケレレ大学やナイロビ大学の学生演劇部による移動劇団の活動に繋がるものである。70 年代のコミュニティ演劇の取り組みは、この関心をさらにグラスルーツ化したものであろう。

⑤ 「アフリカ性は、何にでも必要か」(1962.9.2)

作家の国民文化への貢献の重要な一つに「演劇」がある。たとえば、ナイロビに住むアフリカ人がアマチュアの劇団を結成し、誰かが台本を書いて、皆で演じるのだ。これは、無いものねだりだろうか。そうは思わない。ケニアには人材が多く眠っている。ケニアに根を張った文化を構築することができる。

⑥ 「新たなムードが蔓延』(1963.11.24)

マケレレ大学では、数年前は政治中心、各国の独立祝賀行事が多かったが、最近は文化行事が中心になってきた。以前の卒業生は、政府、会社へ就職する者がほとんどだったが、今はアカデミックな分野へも進出している。マケレレ大学学生演劇部 （ピーター・キニャンジュイが部長）は、1961 年「マクベス」、1962 年 「黒人の隠者」、1963 年「ライオンと宝石」を上演した[16]。マケレレ大学演劇部に移動劇団をつくるこ

[16] 「黒人の隠者」(*Black Hermit*,1962) はジェームズ・グギ、「ライオンと宝石」(*The Lion and Jewel*, 1963) はウォーレ・ショインカの作品である。

とを提唱したい。そうすれば、ナイロビやダルエスサラームでの上演活動も可能となるだろう。[1 年後、実際にマケレレ大学移動劇団が結成され、ウガンダの地方都市とケニア西部で、4 つの言語で上演した。数年後にはナイロビ大学にも移動劇団が出来た]。

⑦ 「なぜ、アフリカでシェークスピアか」(1964.4.22)

シェークスピアは、今日も生きている。彼が提起する政治的、道義的問題は、東アフリカとも大いに関係がある。当時の社会は、多くの点で今の我々の社会と似ている。シェークスピアは、社会を精査し、緊張と抗争を詩的・劇的な用語で表現することを恐れなかった。400 年前、シェークスピアが扱ったこれらの問題は、現代のアフリカの作家が自分に投げかける問題でもあるだろう。作家が、秩序と安定を求める我々の国づくりに、道徳的方向を与えようとするなら、シェークスピアを取り入れる必要があるだろう。

⑧ 「この演劇集団を絶やすな」(1964.7.19)

ナイロビ郊外で、アフリカ劇団 (African Theatre Company) が新たに結成された。児童生徒向けに、三つの劇が上演された。うち二つは、エゼキエル・ムパシェーレによるアフリカ民話の改作劇であった。もう一つは、レベッカ・ンジャウ[17]の作であった。ムパシェーレが指導しているが、支援の必要を痛感する。ナイロビでは、ただの 1 回の公演の後に、解散に追い込まれる劇団が多いからだ。

5. その他

この他、以下も注目される。

① 「『自由軍』の広がりを止めよ」(1962.10.28)

現代の「マウマウ」への批判と言えるだろう。リフトバレーやカレンジン地域での土地不足、その地方へ入植したギクユ農民の問題を扱っている。50 年代の「マウマウ」戦争の

[17] Njau, Rebeka (1932~). ケニアの作家。マケレレ大学で教育学を学ぶ。詩劇『傷跡』(*The Scar*, 1965) は、1960 年に、ウガンダ演劇祭で舞台に上げられた。ケニア初の女性戯曲作家とされる。代表作に『池のさざ波』(*Ripples in the Pool* ,1975)。夫のエリモ・ンジャウ (Elimo Njau) と、ナイロビで、文化芸術活動のギャラリー「パア・ヤ・パア」(Paa ya Paa) を開いた。

時代とは異なる社会的背景での、マウマウへの先祖がえりを批判している。

「もし、非常事態となれば、政府は善悪の区別なしに、全員を討つことだろう」。これは、最近のトム・ムボヤの発言である。この言葉で、私は 1954 年に引き戻された。学校から戻り、母や兄弟に会えると思ったが、彼らは家におらず、私は市場付近にまで探しに出た。1 時間もたたないうちに、私は検問を受ける群衆の一人になっていた。警官が何か尋ねたが、どう答えたのか覚えていない。すぐ前方で、一人の男が殴られており、私は恐怖で動転した。警官は私の返答を嫌ったのか、私を打とうと片手をあげるのが見えた。目を閉じて殴られるのを待ったが、殴られはしなかった。少し先で、一人の女が金切り声で叫び、背中の赤ん坊が泣き始めた。しかし、警官は手を引っ込めなかった。・・・

ケニアの全員が、土地自由軍の触手が全土に及ばないように協力しなければならない。秘密結社に公然と反対したジョモ・ケニヤッタのような人々の努力を讃えたい。・・・土地自由軍が隠していた大量の銃が見つかったと言うのは本当だ。また、多くの人々が土地自由軍のメンバーで、不法な誓約を立てて有罪になったことも本当だ。失業が広がり、全土にかなりの政治的緊張があるのも疑いない。だが、今のこの状況を 1952 年当時と比べるのは間違っている。あの頃は、民衆がうっぷんを晴らす手立てがなかった。当時の政党 KAU も耳を貸そうとしなかったし、政府は政党を信じていなかった。・・・今は違う。土地自由軍は、国民の大多数が解放勢力だなどとは思っていない。国民の不満の声を届ける手立ては、多く存在している。しかも、今の政府は、多くの点で、アフリカ人の政府だ。植民地支配は最終局面に来ている。・・・しかるに、秘密結社と不法な誓約が蘇っているのだ。・・・仕事もなく、耕す土地もなく、飢えに苦しんでいる人々がいることを私は知っている。皆が協力しなければ、土地自由軍は広がるだろう。多くのキクユ人は、まだこの組織に入っていない。しかし、ケニア・アフリカ人民主同盟 (KADU) のリーダーたちが、法を逆手にとって、キクユ人を自分の土地から追い出そうとしている。キクユ人を、リフトバレーやカレンジン地域から追い出すだけで、問題の解決にはならない。かえって、キクユ人を団結させ、土地自由軍の言い分を信じさせて、事態を悪化させるだけであろう。

「初期ジャーナリズム」での引用や出典は、この時期の読書傾向を示すものであろう。

当然、文学作品が多いが、これはマケレレ大学英文科の授業内容とも関係があるだろう。主な名前としては、D. H.ロレンス、ジョゼフ・コンラッド、マシュー・アーノルド、チャールズ・ディケンズ、シェリー、シェークスピアであり、レオン・ダマ、エゼキエル・ムパシェーレ、ジュリアス・ニエレレ、ジョモ・ケニヤッタ、レオポルド・サンゴール、J. P. クラーク[18]、ジェームズ・ボールドウィン[19]などアフリカ・アメリカの黒人作家・政治家も含まれる。しかし、興味深いことだが、ジョージ・ラミング、マーカス・ガーベー[20]、その他カリブ海作家・思想家はもちろん、後年の思想と文学に決定的な刻印を及ぼすことになるフランツ・ファノン[21]を知ったという証拠はない。また、マケレレ時代の著述に、マルクスやエンゲルスは一度も現れない（このうち、ラミングについては、1961 年頃に知っていたはずである）。

【初期ジャーナリズム一覧】

1) 「『アフリカ的人格』は妄想だー虎は『ティグリチュード』を持つか」'The African Personality' is a Delusion : Do Tigers have 'Tigritude' ? *Sunday Post*, 1961.5.7.

2) 「新しい声：アフリカ人作家の登場」The New Voices : Some Emerging African Writers, *Sunday Post*, 1961.6.4.

3)「アフリカの文化 : ケニヤッタの誤り」African Culture : The Mistake That Kenyatta Made, *Sunday Post*, 1961.8.6.

4) 「『ケニア山のふもと』のノスタルジア」The Nostalgia of '*Facing Mount Kenya*', *Sunday Post*, 1961.8.13.

5) 「新しい村の問題点」Some Problems of the New Villages, *Sunday Post*, 1961.8.20.

---

[18] Clark, John Pepper (1935~)。現在は、Bekederemo を名乗る。ナイジェリアの詩人、戯曲作家。1960 年、イバダン大学卒業。同大学で教えたほか、エール大学などでも教えた。代表作に『詩集』(*Poems*, 1961)、戯曲に『山羊の歌』(*Song of a Goat*, 1961) など。

[19] Baldwin, James (1924~1987). アメリカの黒人作家。人種や性の問題を扱った作品が多い。代表作に、自伝的な『山にのぼりて告げよ』(*Go Tell it on the Mountain*, 1953)、『アメリカの息子のノート』(*Notes of a Native Son*,1955)、『次は火だ』(*The Fire Next Time*, 1963) など。

[20] Garvey, Marcus (1887~1940). ジャマイカ生まれ。黒人民族主義のリーダー。アフリカの植民地解放を訴え、カリブ海やアメリカの黒人に向けて、アフリカ帰還運動を組織した。ジャマイカの国民的英雄とされる。

[21] Fanon, Frantz (1925~1961). フランス領マルチニク島生まれ。フランスで精神医学を学び、『黒い皮膚・白い仮面』(*Peau Noire, Masque Blancs*, 1952) を発表。1956 年からアルジェリア革命に参加し、独立直前に病死した。この間に『地に呪われたる者』(*Les damnés de la terre*, 1961) を書いた。植民地支配からの解放を目的にした暴力革命を評価した。これらの著作は、第三世界の解放運動に大きな影響を与えた。

6)「教育を受けたアフリカ人は、この挑戦に立ち向かえるか」Can the Educated African Meet This Challenge?, *Sunday Nation*,1962.5.27. [村から初めて中学へ進学した少年。賞賛の的。長老の褒め言葉。母親の誇り。少年が受ける西洋式教育は村の生活とは縁がない。二つの世界の子供になる。社会に亀裂。階層の分化へ。マケレレ卒業生の給料と村の労働者の給料のギャップ。二つの国民が生まれる危機。タンガニーカのニエレレの政治哲学に注目]

7)「未来とアフリカ人農民」The Future and the African Farmer, *Sunday Nation*, 1962.6.3. [農業の重要性。農民の経済基盤の確立が大切。アホイ（借地人）制度の問題点。土地不足。ローン制度。農業技術教育の必要。技術指導者の不足。長期的農業政策の必要。生産力の向上へ]

8)「暗闇から出て、太陽を見よう」Let's Get Out of the Dark and Take a Look at the Sun, *Sunday Nation*, 1962.6.17. [人種間の悪感情。人種協調の夢。独立への挑戦、課題。貧困・病気・識字率]

9)「成人教育の取り組みは必至」Adult Education Must Be Tackled, *Sunday Nation*, 1962.6.24. [若い世代への期待。無知の克服。民主主義の発展条件。教育の恩恵を受けた者の少なさ。成人教育の緊急性。ラジオ、テレビの利用による大衆教育の必要。人間への投資。教育の重要性]

10)「新しい意識の伝令たち」Here are the Heralds of a New Awareness, *Sunday Nation*, 1962.7.1. [英語で書くアフリカ人作家会議のこと]

11)「もっと学校の統合を」Let's See More School Integration, *Sunday Nation*, 1962.7.8.

12)「対立意見を聞く自由を」There Must Be Freedom to Hear Opposite Points of View, *Sunday Nation*, 1962.7.15. [カレンジン-マサイ同盟の結党について。政治生活の変化。政党誕生を歓迎。この政党の反キクユ的性格。部族主義の克服。政党の部族的性格の打破が必要。真の民主主義]

13)「我々の裁定を」Why Not Let Us Be the Judges ?, *Sunday Nation*, 1962.7.29.

14)「過去から何を受け継ぐか」Let Us Be Careful About What We Take from the Past, *Sunday Nation*, 1962.8.5. [独立間近。過去の遺産から良いものだけを受け継ごう。すべての black doll を受け継ぐべきでない。女子割礼は時代遅れ。婚資も廃止すべき。20 世紀国家としては時代遅れ]

15)「ここに私の望むケニアがある」Here's the Kenya I Want, *Sunday Nation*, 1962.8.12. [貧困層の問題。土地なしの農民。独立には経済発展が必要。国民全員の協力。外国支配からの自由も必要。一党制が必要。部族主義・人種主義の克服]

16)「中立主義とは何か」What Do We Really Mean by Neutralism ?, *Sunday Nation*, 1962.8.19.

17)「連邦はどうなったか」What is Happening about Federation ?, *Sunday Nation*, 1962,8.26.

18)「アフリカ性は、何にも必要か」Must We Drag Africanness into Everything ?, *Sunday Nation*, 1962.9.2.

19)「隣人はどうか」What About Our Neighbours ?, *Sunday Nation*, 1962.9.9.

20) 「敵対者にどれほどのロープを与えるか」How Much Rope Should Opponents Be Given ?, *Sunday Nation*, 1962.9.16. [政治公約のスローガン。部族主義克服。政府は対立する声に敏感に。新聞報道に自由の制限。民主主義の尊重を]

21) 「スワヒリ語に正当な位置を」Swahili Must Have Its Rightful Place, *Sunday Nation*, 1962.9.23.

22) 「なぜこの二人の指導者は歴史から学ばないのか」Why Don't These Two Leaders Learn from History ?, *Sunday Nation*, 1962.9.30. [マウマウに触れる。神経症的に非常事態を恐れた。ガーナ、南ローデシアの非常事態。独立は無血革命でなければならない。ンクルマを批判]

23) 「女性たちを先頭に」Our Women Must Be Allowed to Get Ahead Too, *Sunday Nation*, 1962.10.7. [女子教育の学校開設歓迎。講義科目にアフリカ史ほか。女子教育の遅れ。1949 年設立のマケレレ大学の女子卒業生は 3 人だけ。現在もケニア人女子学生は 2 人。女子の社会進出の大切さ]

24) 「独立には信頼が必要」Independence Needs a Degree of Trust, *Sunday Nation*, 1962.10.14. [ウガンダ独立。マケレレ大学職員のスト。ストライキ反対。ローマカソリックとアングリカンの対立]

25) 「自由軍の広がりに歯止めを」We Must Halt Spread of 'Freedom Army', *Sunday Nation*, 1962.10.28. [非常事態の思い出。学校から帰宅すると、家がない、母がいない記憶。悪夢。「土地自由軍に反対」。秘密結社に反対。土地自由軍は解放勢力ではない。「植民地主義は最終段階」。KADU にも反対]

26) 「この気概を育てよう」Here's a Spirit Kenya Must Encourage, *Sunday Nation*, 1962.11.4.

27) 「アフリカ人作家は新しい見方を」African Writers Need a New Outlook, *Sunday Nation*, 1962.12.2.

28) 「オボテに賞賛、ケニアは自力で」All Praise to Obote but Kenya Must Help Itself, *Sunday Nation*,1962.12.9. [ケニアの独立を早めたい。マーティン・シククの意見に反対]

29) 「新聞の役割」Role of the Press, *Sunday Nation*, 1962.12.23[新聞のあり方。ンクルマ批判あり]

30) 「求む—芸術にふさわしい場を」Wanted－A Proper Place for Art, *Sunday Nation*, 1962.12.23. [ケニア独立の遅れ。文化的覚醒の必要。芸術家は個性が大切。社会から離れて見ることが大切]

31) 「神の子たちに大祝祭」Big Day for God's Children, *Sunday Nation*, 1962.12.30. [一年の計は元旦にあり。独立後への期待。ランカスターハウス会議への期待]

32) 「伝道団の失敗」I Say Kenya's Missionaries Failed Badly, *Sunday Nation*, 1963.1.6.

33) 「協力の気概だけでは不十分」Co-operative Spirit is Not Enough, *Sunday Nation*, 1963.2.3.

34) 「目的を忘れるな」Don't Forget Our Destination, *Sunday Nation*, 1963.2.10.[教育問題。制度の改革。Education begins at home. アフリカ史の教育。宣教師、キリスト教肯定。教育の非植民地化。科学教育の強化]

35)「兄弟でも喉を切り合う」Even Brothers Can Cut Throats, *Sunday Nation*, 1963.2.17. [バンドン会議。アフリカとアジアの出会い。インド独立。非暴力肯定。モシ会議。アジア・アフリカ連帯機構。帝国主義の攻撃ばかりでは無益。ケニヤッタに賛成。アジア・アフリカ連帯のスローガンより実践的つながりが大切]。

36) 「衣食足りて礼節」Respect Will Come When We Are Self-Sufficient, *Sunday Nation*, 1963.3.17. [ケニヤッタ演説。『ケニア山のふもと』評価。アフリカ人の尊厳の復権。社会の安定。共産主義、社会主義を批判、揶揄]。

37)「マケレレ、そこはオアシスだ」The Oasis That is Makerere, *Sunday Nation*, 1963.3.24. [自分の体験。1959 年マケレレへ向けて村を発つ。教育への欲求。白人と共学。教育の普及の必要]。

38) 「おそらく家庭に、スウィートホームに」Perhaps It's a Case of Home, Sweet Home, *Sunday Nation*, 1963.4.7 [幼少時の体験。ナイロビ、約束の町。都会生活を体験した兄。カンパラの国立劇場。ナイロビの魅力]。

39) 「ムボヤは正しい―教育は投資だ」Mboya is Right－Education is an Investment, *Sunday Nation*, 1963.4.21. [KANU の教育政策の重要性。教員不足。コロニアル・メンタリティからの離脱。教員養成。教育施設の不足。ウガンダに依存。義務教育よりも、施設の充実が先決。人材の多くが教師よりも政治、行政官に流れる現実。教師の薄給]。

40) 「むかし、酒は老人のもの、今は子供が酒を」In the Old Days it was for the Old Men to Drink－Now Even Children Tread on the Toes of Their Fathers, *Sunday Nation*, 1963.5.12. [密造酒。飲酒。失業と飲酒]。

41) 「共感できる、でも彼らの役に立っておらず悩む」I Nodded in Sympathy, But Inwardly I was Groaning, for I Was No Use to Them, *Sunday Nation*, 1963.5.26. [失業問題。ワイロ。警官へのワイロ。ワイロ社会]。

42) 「国に変化が来た」A Change Has Come Over the Land－A Sense of Destiny Moves in Most People, *Sunday Nation*, 1963.6.2. [選挙終わる。キャンペーン。労働意欲。独立以後の民衆の期待は]。

43) 「大学にもっと柔軟性を」Now Let's See More Flexibility from University Colleges, *Sunday Nation*, 1963.7.7.

44) 「連邦化の問い」Isn't Time the Public Were Asked about Federation ?, *Sunday Nation*, 1963.9.1.

45) 「こころが折れる手紙」The Letter That Made My Heart Sink Inside Me, *Sunday Nation*, 1963.9.15. [教育問題。ウガンダの私立学校の劣悪さ]。

46) 「アフリカ合衆国への障害」Lack of Communication May be Barrier to an African United States, *Sunday Nation*, 1963.9.22.

47) 「部族的世界観を壊せ」It’s Time We Broke Up This Tribal Outlook, *Sunday Nation*, 1963.10.20.

48) 「独立の三つのレベル」The Three Levels of Independence, *Sunday Nation*,1963.10.27. [ナイジェリアの共和制。ウガンダ独立一周年。独立への三段階。①政治的自由 ②経済的自由 ③心理的自由。生活水準の向上、劣等感からの解放など]。

49) 「苦難の原因は自分に」It’s Time We Recognized That the Root-cause of Our Troubles May Lie in Us, *Sunday Nation*, 1963.11.10.

50) 「新しいムードが蔓延」A New Mood Prevails, *Sunday Nation*, 1963.11.24. [マケレレの雰囲気。数年前は政治中心、独立祝祭。今は、文化行事中心。今はアカデミックな職場を求める者も多い。マケレレ学生演劇部の活動。ピーター・キニャンジュイが部長。1961 年「マクベス」、1962 年「黒人の隠者」、1963 年「ライオンと宝石」]。

51) 「芸術の実験」Art Experiment Which Deserves to Succeed, *Sunday Nation*, 1963.12.29.

52) 「黒人の神話」The Negro is a Myth, *Daily Nation*, 1964.4.9

53) 「なぜ、アフリカでシェークスピアか」Why Shakespeare in Africa ?, *Daily Nation*, 1964.4.22.

54) 「アフリカ社会主義」African Socialism : Two Views, *Daily Nation*, 1964.5.9.

55) 「教育を受けたアフリカ人への期待」More is Needed from Educated Africans, *Sunday Nation*, 1964.6.7.

56) 「ヒューマニズムとアフリカ社会主義」Humanism and African Socialism, *Daily Nation*, 1964.6.12.

57) 「年金―満足出来ない」Pensions－We Still Can’t Rest Satisfied, *Sunday Nation*, 1964.6.14. [労働者の年金制度。都市労働者。家族との絆の崩壊。障害者の雇用問題。アホイ（借地人）制。土地問題。保険制度の充実必要]。

58) 「教員も現金が欲しい」Teachers, Too, Want Cash !, *Sunday Nation*, 1964.6.21.

59) 「ケニア軍に大量の志願」Thousands Flock to Volunteer for the Kenya Army, *Daily Nation*, 1964.6.23.

60) 「この部族感情をどう殺すか」How Do You Kill These Tribal Feelings ?, *Sunday Nation*, 1964.7.5. [部族主義の問題]。

61) 「アフリカの詩人政治家」He’s Africa’s Poet-Statesman, *Daily Nation*, 1964.7.10. [レオポルド・セダール・サンゴールについて]

62) 「労働者はどうなるか」What About the Workers ?, *Sunday Nation*, 1964.7.12 [ケニア労働連合の分裂。「団結は力なり」。統一の必要を説く]。

63) 「コメンタリー」Commentary, *Daily Nation*, 1964.7.17. [アフリカ諸国間の連携強化について]

64) 「この劇団を絶やすな」I Hope THIS Theatre Group Won't Die, Too, *Sunday Nation*, 1964.7.19. [アフリカ劇団の結成。ムパシェーレ指導の脚色劇。ンジャウの劇。若い女優。ウガンダの演劇。援助の必要]。

65) 「ケニア人子弟にバレー」Kenya Children Take to Ballet, *Daily Nation*, 1964.7.23

66)「ニエレレ大統領が語ったように」As President Nyerere Was Saying in 1960, *Sunday Nation*, 1964.8.2. [東アフリカ連邦の構想。東アフリカのバルカン化を懸念。東アフリカの同時独立は出来なかった]。

67) 「コメンタリー」Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.4. [ナイロビ大学で開催されたパン・アフリカ学生会議について]

68) 「コメンタリー」Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.6 [欧米市場への経済的依存について]

69) 「コメンタリー」Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.7. [アメリカ駆逐艦攻撃に対する報復としてのアメリカによる北ベトナム魚雷基地の爆撃について]

70) 「コメンタリー」Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.8. [特にイアン・ヘンダーソンの国外追放についての政府の説明責任について]

71) 「年末までに共和制へ」A Republic Before the End of the Year, *Sunday Nation*, 1964.8.9. [共和制の必要。大統領権限の強化を。内閣改造]。

72) 「コメンタリー」Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.13. [政策決定過程の公開の必要について]

73) 「コメンタリー」Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.14. [連邦化について]

74) 「コメンタリー」Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.15. [新憲法下での地方分権について]

75) 「コープの強化を」Now the Emphasis Must be on Co-ops, *Sunday Nation*, 1964.8.16. [入植計画。土地政策。100 万人の入植計画]。

76) 「コメンタリー」Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.18. [独立ケニアでの女性の役割について]

77) 「コメンタリー」Commentary, *Daily Nation*, 1964.8.19. [学生の役割について]

78) 「怠業者を忘れ、必死の人を思い出せ」Forget the Quitters, Remember the Desperate, *Sunday Nation*, 1964.8.30. [失業問題。失業者にも内容に違いあり]。

参考文献

本文中、リストに上げた「初期ジャーナリズム」記事 78 篇のほかに、以下がある。

Lindfors, Bernth. 2011. *Early East African Writers and Publishers, Ngugi wa Thiong'o, Okot p'Bitek, David Maillu*, Africa World Press.